

# カガヤキ

暫定的補足表題「ウオランタス」  
ラテン語でボランティアの意

No.71(2023.6.15 刊行)、広報委員会編集  
茨城県立図書館発行  
禁複写転載©広報委員会

## コロナ禍を乗り越えて 県立図書館の新たな旅立ち

茨城県立図書館長 小田部修一



小田部修一さん

茨城県立図書館の館長の小田部でございます。

県立図書館のボランティアの皆様、日頃から県立図書館の運営にご協力・ご支援いただきまして心からお礼申し上げます。

コロナ禍の中で県立図書館も、県の外出自粛措置・臨時休館や三密対策など県民の方に多くのご不便をおかけしました。しかしながら、そのような状況でも図書館を利用する方々は多く、我々職員は利用者の方のご期待に添えるよう誠心誠意対応してきました。

今、約3年間にわたるコロナ禍を乗り越えて、我々は新たなステージに立っております。県立図書館としても、新たな取組を積極的実施していくべきことが望まれているのではないのでしょうか。

また、知の拠点として、利用者を待つだけの姿勢ではなく、県民に情報を積極的に届けていく姿に変わる必要があるのではないのでしょうか。

県立図書館で何かおもしろいことやっている、行けば楽しいイベントがある。星乃珈琲店でコーヒーを飲む。そのためだけでもいいので、図書館に足を運んでいただけるように、情報の発信を強化し、そこから本に触れ、読書に親しんで貰ってリピーターを増やすことが重要ではないかと考えております。

そのためには、我々職員だけではなくボランティアの皆様からのお力添えが必要です、一緒に手を携えて新たな図書館を作りたいと考えております。

まず、職員が図書館を好きになり、ボランティアの皆様が楽しく働ける環境を作り、職員とボランティアの皆様が一体とな

って図書館を活性化することで、一人でも多くの図書館を応援する利用者を産み出して行きたいと考えております。

新たな取組を行っていくことは、大変な労力を必要とします、ボランティアの皆様のご尽力を今まで以上に必要としますので、より一層のご協力をお願い申し上げます

## 図書館司書の業務と責任

館内サービス課 矢澤美津子



矢澤美津子さん

ボランティアの皆様には日頃から図書館の運営にご協力いただきましてありがとうございます。皆様の協力がないと運営でき

ない部分もあり、その熱意には、感謝に堪えません。

さて、図書館司書の業務と責任について紹介してほしいと依頼がありましたので、まずは図書館がどんな仕事をしているのかを紹介します。

見学に来た小学生に図書館の仕事を聞いてみると、本の貸出が真っ先に上がりますが、本は図書館に当たり前にあるのではなく、どれを集めるか、本をどうやって探せるようにするか、その選書・登録・装備などを行っているのが情報資料課です。利用者や県内市町村図書館の要望を考えながら、予算の範囲でどんな資料を集めるか決めています。

郷土資料の場合は、書店からの購入よりも寄贈にて収集する方が多いです。県や市町村が発行している報告書や統計書、教科書副読本、地域史をまとめた雑誌も集めています。

図書館システムの管理や視聴覚資料の整理・活用も情報資料課が担っています。

このようにして集めた資料を、利用者が閲覧・貸出できるよう管理するのが館内サービス課です。借りる前の調べ物のご相談も承ります。私はこの調べ物の相談を担当業務としています。書名や著者名が決まっている本の検索から、大まかな内容から本を探すお手伝い、特定の事柄が掲載されている資料を探す等、調べ物の相談も様々です。

水戸藩について調べている人、明治期の政治家について調べている人、昭和の事件事故について調べている人、特定の技術について調べている人。質問される利用者の方がその分野に詳しいことも多いので、概

要を教わりながら、どの資料を調べるか、どのキーワードで調べるかあたりをつけながら探していきます。新聞・雑誌・データベースも大切な情報源です。国立国会図書館が公開しているデジタル化資料も利用します。

その結果として、他県の市町村史を取り寄せたり、論文の所在を調べて複写物を取り寄せたりすることもあります。

調べ物をしていると、これまでの図書館職員がその資料を収集し、書庫ではなく、利用者が手に取れる開架に資料を配置している理由がわかります。どんなに古くても、調べるならまずこの資料。必要な資料を収集してくれた先人に感謝です。

読書振興のために、県内の図書館や団体と協力しているのが、皆様おなじみの普及課です。図書館に来館する利用者に向けた事業の他、図書館間の物流・相談役を担っています。

最後に、施設や職員の管理を行っているのが、企画管理課です。

日頃の業務においては、どうやったら利用者が本を探しやすい環境を整えられるのか、利用者の要望に応えつつ、他方で課題とならないためにはどうしたらよいか、多方面から考えるようにしています。

例えば展示。展示を見て面白そうと借りていく人には、まとまっている方が使いやすいですが、本のタイトルから探している人が、所定の位置に本がないと困ってしまいます。探しやすい・戻しやすい・本が迷子にならないためにはどうしたらよいか、利用者・職員双方の立場から良い方法を探ります。

市町村図書館や学校図書館の方とは、県

民が自身で調べ、考え、まとめて、発信する、そのために図書館ができることは何か、まず本を読む力をつけるためにはどうしたらいいか話すこともあります。

本を楽しむきっかけになるおはなしかい。ここを元気に保つなつかしの映画会。昔読んだ本をまた読みたい。子どもの頃の写真や映像が見たい。視力が弱くなっても大活字本や朗読CD、対面朗読などで本を楽しむことができます。図書館の可能性は幅広く、時には立ち止まりながらも、県民の豊かな文化が育まれる拠点となることを目指していきたいと思います。

### 釣りで幸せを釣る？

普及課長 鈴木忠雄

中国の古いことわざにあるとかないとか、詳細は、不明ですが、

- ・一日幸せになりたければ酒を飲みなさい、
  - ・三日幸せになりたければ結婚しなさい、
  - ・七日幸せになりたければ豚を殺して食べなさい、と
  - ・一生幸せになりたければ釣りをおぼえなさい、
- という言葉をご存じですか？

偶然にも釣りを趣味にしてきた私は、この言葉知った時に「俺は間違ってた」と変な自己肯定感を持ったものです。私はずいぶん若いころから釣りが大好きでした。

釣りを始めたのは、幼いころの体験が元

になっています。自営業で写真館を営んでいた父は、とにかくお店を開けておかないと不安な人でした。そのためか、大晦日も元旦もお構いなしで、客などほとんど来ないにも関わらず、店を開けていました。そんな年中無休に近い営業をしていた父は、なぜか夏休みになると、たった一日だけ、突然思い立ったかのように家族5人を車に乗せ、奥日光へと向かうのです。今思えば、父にとっては、唯一の家族サービスだったのでしょう。私と兄はうれしくてたまりませんでした。当日は、朝食のおにぎりを祖母と母が握り、好きなお菓子を持って車に乗り込みます。

夏とはいえ、早朝の空気はさすがしく、朝陽の輝きは、私たち兄弟の興奮をこれでもかと高めていきます。旧岩瀬町から真岡を抜けて国道294号線に乗り、宇都宮へ、そして、いろは坂を登れば、標高1000mに達する奥日光中禅寺湖が真っ青な満水をたたえて出迎えてくれます。車はさらに進み、湯の湖へ到着。湖畔には無数の太公望がきらめく湖面に糸を垂らしていました。あの光景はいまだに強烈に脳裏に焼きついています。

それを見て「釣りがしたい！」と言う私たち兄弟に、父はなおも車を走らせ、金精道路を抜けて群馬県片品村へ、そして、釣りができる「白根御苑」で初めての餌釣りを体験させてくれたのです。初めて持つ竹竿、玉ウキ、針とねり餌。心臓のドキドキが止まりません。そして始まった初体験。これが楽しいこと楽しいこと！

目の前ではニジマスが入れ食いです。  
(そりゃそうだ、釣り堀だし) 兄と私は、無我夢中で竿を振り続けます。もちろん当

たり(魚が餌をくわえること)に対し、合わせ(ウキの動きに合わせて竿を立てて針を魚の口にかけること)がうまくいかないことも多く、魚たちにもてあそばれていたのですが、私はその魚との駆け引きに、すっかりと魅了されてしまったのです。振り向けば大らかに笑う母と祖母。子供たちの笑顔をつまみにビールをあおる父(このころはなんでもありでした)ほんの束の間だけど、家族5人にとって、最高のひと時だったような気がします。たくさん釣り上げたニジマスは、その場で塩焼きにしてみらい、豪快にほおぼり、そのおいしさに頬が落ちそうでした。

おいしい、楽しい、最高!さんざん遊んで、観光して、宇都宮インターチェンジ近くの「肉の万世」でびっくりするくらい高価な(そう思えた)ステーキを食べさせてもらい、疲れ果てて寝ているうちに帰宅。当時の自分にとっては、夢のような一日だったのです。

それからというもの、釣りに目覚めた私は、近所の池や川を見つけては、何か釣れないかと竿を出す日々を送りました。とにかく土日は、釣り、釣り、釣り。家にあった延べ竿で満足いく釣りができるようになるまで体験を重ねていきました。

中学生、高校生になっても、休みの日を見つけては釣り竿を背負って遠征しました。自転車に2時間乗って釣り場に行くなんてことも多々ありました。自然の中で無心に竿を振る、静寂の中で魚と対峙する、集中してウキを見つめる。魚がかかったときの興奮、逃げられたときの悔しさ、作戦が功を奏した時の喜び、天気と釣果の関係、季節の花や木の名前、水辺の生きもの

など、釣りを楽しみながら学んだことは数知れません。

そして 18 歳の時、現在も続けているフライフィッシングという釣りに出会います。フライフィッシングとは西洋毛針釣りのことで、太い糸を鞭のように前後に振り、糸の重さによって遠くに毛針（カゲロウなど虫に似せた擬餌針）を運ぶという釣りのスタイルです。元々は、イギリス紳士のスポーツであり、ジャケットにハンチング帽、ネクタイを着用して行うような格調高い釣りだと言われています。フライフィッシングにどっぷりとはまり、練習を重ね、やっと一通りのことができるようになった時、とうとう湯の湖への釣行を決行しました。しかも、同時期からフライフィッシングを始めた兄と共に！

湯の湖は、幼かった兄弟が憧れを抱いた当時のままの美しい姿で私たちを迎えてくれました。ゴム長をはいて腰まで水につかり、おもむろに竿を振り始めます。解禁当初である 5 月の湯の湖の水温はわずか 10 度。10 分も入水していると寒さで震えが止まらなくなります。それでも念願の湯の湖に立つ興奮が上回り、うれしくてたまらなかったことを思い出します。そして、湯の湖での初物との出会い！うっとりと思つめたニジマスは、きれいな水で育っているせいか、背中の色は青みがかり、ヒレも美しく伸び切っていました。父に湯の湖に連れてきてもらってから十数年が経ち、私たち兄弟は、あの時の夢を果たすことができました。

後で知ったことですが、湯の湖は日本で初めてフライフィッシングが行われた場所とのこと。1902 年（明治 35 年）英国の商

人が、マスを放流して釣りを楽しんだとのことで、「日本フライフィッシングの聖地」と言われているそうです。幼い時に訪れた湯の湖で釣りに思いをはせ、成長して戻ってくるのができたことが何か運命づけられていた気がしてとてもうれしく思えました。

今では成人した長男が、フライフィッシングに、どっぷりはまっています。最近では休みが合えば人里離れた山奥に入ります。私も二人の息子に釣りの楽しさを伝えてきました。長男は今や、私を超える技術と熱意をもっています。亡き父がくれた釣りのきっかけは、私を一生幸せにしてくれているのかもしれませんが。今年も湯の湖を初め、秋田・宮城と遠征して、美しい魚たちと出会いたいと思います。



湯の湖のニジマス





山奥での釣り(鈴木忠雄さん)



秋田のイワナ



鳥海山周辺の川にて

## 通信紙が発行されるまでのプロセス

広報 G 桜井 淳

通信紙の発行において、広報 G の作業分担は、編集作業(企画、原稿依頼、原稿校閲、紙面編集、原稿校正、編集後記、発行のための県立図書館内手続き)のみである。

発行責任は、県立図書館にあり、県立図書館の作業分担は、発行に値する内容であるか否かの判断であり、検討結果の紙面に書き込まれた記録からすると、県立図書館の各課長と館長が判断しており、そのまま県立図書館 HP に掲載される場合もあれば、表現修正や文章削除の場合もあり、経験的に言えることは、半々である。手続きしてから掲載まで、標準的には、二週間程度。

広報 G では、入手した原稿をそのまま紙面作成に使用しているわけではなく、高い判断能力で「校閲」している(過去 8 年間の広報 G の編集責任者は茨城新聞社客員論説委員)。

この「校閲」とは、たとえば、文学作品の出版において、校正以前の作業として、質の高い作品として成立するか否かの検討(文章論の正しさ、論理展開の正しさ、用語使用の正しさ、社会背景や歴史解釈の正しさ、など)のことである。

文学作品であれば、一冊の標準的な分量は、WORD の A4 標準書式で、150 枚くらいであり、校閲箇所は、少なくとも数百箇所、多い場合には、数千箇所にも及び、それにより、一冊の本として完成するわけで

はなく、最終段階として、校正作業があり、普通、一冊には、数千箇所の校正が生じる。作家の作品には、例外なく、「校閲」と校正が入っている。

通信紙では、ひとつの原稿の分量が少ないため、ごく普通に、社会で通用することをめやすとしているため、最低限の条件(形式、読みやすさ、分かりやすさ、用語使用の正しさ)を満たせば良いと判断しており、「校閲」も校正も負担になるほどの作業量ではない。

## 編集後記

通信紙は、これまで、原則として、本文は、「である調」、「編集後記」は、親しみが持てるように、「です・ます調」にしてきましたが、小田部さんと矢澤さんと鈴木さんの原稿は、「です・ます調」になっており、内容からして、「である調」に直さない方が良くと判断し、例外的な取り扱いですが、そのままにし、句読点や段落など、読みやすいように、いくぶん編集する程度に留めました。

それにしても、小田部さんと矢澤さんと鈴木さんの原稿は、すばらしい出来栄であり、日常的な光景から、知らぬ間に、専門の奥深いところまで導いています。鈴木さんは、国語の先生であり、多くの文学作品を読みこなしていることが読み取れ、作家並みの表現力と論理構成力があり、どこにでもあるような日常的な光景を小説のレベルまで、大きく言えば、哲学レベルまで高めています。三人のような原稿を書ける人は少ないと思います。

それにしても鈴木さんが撮影した写真は、画素数が多く、アングルが良く、気持ちが良いほど、実にきれいに映っています。

鈴木さんの溪流釣りで思い出すのは、歴史的存在の今西錦司さん(京大名誉教授、生態学者、文化人類学者、登山家、『今西錦司全集(13巻)』(講談社、1993-94))の「棲み分け理論」です。今西さんは、多くの溪流を探索し、特に、そこに生息している魚の特徴を統一的に読み解き、オリジナルな考え方に基づく「棲み分け理論」に至

りました。それは、幅の狭い流れの急な溪流には、身体が細く、流線型の魚が住み、逆に、幅の広い流れの緩やかな溪流には、身体がいくぶん太った魚が住むと言う理論です。

今西さんには、もうひとつの「棲み分け理論」があり、山に分布する樹木は、標高によって、生息できる樹木の種類が決まっており、ある標高の範囲内で、横に、帯状に、縦に、ピラミッド構造を構成していることです。

学者は、山に登ることだけが目的ではなくて、自然全体が研究対象なのです。

館長には、コロナウイルスに対する規制が緩和されたことに伴う今後の県立図書館にかかわる展望について、書いていただきました。大変こなれた読みやすい表現であり、コロナ対策緩和後の県立図書館の方針と意気込みが読み取れ、県立図書館の職員とボランティアには、心強い内容です。

コロナウイルスは、2019年12月、世界で初めて、中国の武漢で確認され、わずか半年間で、世界に拡散され、米国のモデルナ社と英国のファイザー社は、早くも、世界初の確認からわずか一年後の2020年12月に、コロナウイルスワクチンの販売を開始しました。

日本では、厚労省薬事・食品審議会が審議、政府に答申し、政府は、両社から輸入することを決定しましたが、緊急時への対応と言うこともあり、両社の臨床試験期間の短さに驚くとともに、日本との比較において、緊急時に対する考え方と薬事許認可制度の相違に戸惑いを覚えます。

桜井 淳